

シリーズ  
原発・いのち・みらい  
その22

第7回原発・いのち・みらい講演会・要旨

メディアが報道しない福島の実態  
原発震災後の行政対応と「脱被ばく」の課題

講師・荒木田岳氏

理事 齊藤 典才 (金沢市・外科)

七月七日(日)午後二時

から、第七回目になる「原  
発・いのち・みらいシリ  
ーズ講演会」を近江町交流  
プラザにおいて開催した。医  
療関係者と市民を合わせて  
約九十人が参加し、会場は  
終始熱気に包まれていた。

講師の荒木田岳氏は金沢  
市の出身で、修士課程を新  
潟大学で過ごされたが、そ  
の時、新潟県巻町で起こっ  
た原発建設反対の住民運動  
に期せずして参加するよう  
になったそうである。荒木  
田氏の行くところすべてに  
原発があり、彼が今こうし  
て奔走しているのは何かし  
ら運命のようなものかもし  
れない。

荒木田氏の一番の主張  
は、「脱原発」ではなく「脱  
被ばく」である。しかも、  
「みんなの脱被ばく」であ  
る。福島では、多くの人々  
が今も被ばくしながら現地  
に留め置かれていて。県外  
に自主避難した人々に対し  
ては、「福島は安全なのに、  
なぜ避難するのか」といっ  
た悪意に満ちた非難が浴び  
せられ、福島に残っている  
人々に「住むのは危険だ」  
と意見するのは「福島に住  
むものを傷つける無神経な  
発言」と批判される。そう  
やって、人々が分断されて  
いるのである。また、脱原



福島で今起きている真実について豊富な資料を持って講演する  
福島大学准教授の荒木田岳 (あらかきたけ) 氏

発電を訴える人々の中で、「除  
染すれば大丈夫」と言う人  
もあれば、「除染が必要な  
くらい住むには危険」とい  
う人もあり、結局「脱原  
発」でも、まとまることは  
難しい。

行政の対応もまた矛盾に  
あふれている。例えばモニ  
タリングポストはその周囲  
だけが除染されており、公  
表されている空間線量は  
まったくあてにならない。  
そのことは、地域の人々も  
よく知っている。昨年、福  
島県農業総合センターが重  
要な指摘を行った。福島に  
おいて、汚染されていない  
大根で切り干し大根を作る  
と、ひどいもの  
は三千ベク  
レル/kgにな  
り、地表近く  
に干したもの  
ほど汚染が激  
しかったので  
ある。にもか  
かわらず、福  
島県原子力セ  
ンターは、こ  
のことが判明  
した後も、地  
上八メートル  
(二階建て建  
物屋上)で定  
時降下物の量  
を測定してい



冒頭約30分にわたり、福島の小児甲状腺がんの深刻な状況について解説する  
「原発・いのち・みらいプロジェクト」の吉田均氏 (能美市・小児科)



フロアからはたくさんの質問や関連発言が相次いだ  
(7月7日・金沢市近江町交流プラザ)

る。荒木田氏は地上近くで  
も計測するよう電話で二度  
も要望したが、何の回答も  
なかった。原子力センター  
は、最近密かに地表近くで  
測定しているが数値の公表  
をしていない。また、汚染  
度合いと空間線量に相関が  
ないことも分かった。それ  
は、空間線量だけ気にして  
いても安全は守られないこ  
とを意味するが、行政は、  
空間線量だけに人々の注意  
を引きつけている。

国は、原発事故直後に食  
品の安全基準を五百ベク  
レル/kg未満と定めたが  
(二〇一一年度中の暫定規  
制値)、荒木田氏自身が原  
発事故前の食品の残留放射  
線量を文科省環境放射線モ  
ニタリングデータベースで  
調べたところ(過去五十年  
分ほど存在している)、福  
島県内では、たった一度、  
一ベクレル/kgを超えたこ  
とがあっただけであった。

報道されている。  
また、福島では「オール  
福島でがんばろう」とか、  
「食べて応援しよう」と盛  
んに言われている。福島県  
相馬市で事故後はじめて水  
揚げされたズワイガニは、  
北陸地方へ出荷されてい  
る。福島県三春町の学校給  
食用のネギを福島県外産と  
偽って納入した事件もあつ  
たが、産地の偽装問題もど  
こまで広がっているのか分  
らない。これまでは売れ  
残っていた福島産農作物  
が、今は在庫が一掃されて  
しまった。それらは、いつ  
たいどこへ行ったのだろ  
うか。

つまり、事はもう福島だ  
けの問題ではないのである。  
荒木田氏は問いかけ  
る。あなたはどちらの立場  
ですか?。「食べて応援」  
か「みんなの脱被ばく」か。  
「食べて応援」ということ  
の意味は、汚染地で被ばく  
しながら農業を続けること  
を「応援」ということ  
にほかならない。人々が福  
島に住み、被ばくし続ける  
ことを容認すれば、それは、  
どこかで自分自身を被ばく  
させることにもつながる。  
だから、「福島で起こって  
いることを、自分の問題と  
して考えてほしい」と荒木  
田氏は結んだ。

「原発・いのち・みらい」への  
ご寄稿を募集しています

福島第一原子力発電所の事故は、今なお、深刻  
な状況が続いています。保険医協会では、会員・関  
係団体・個人の方々からのご寄稿をいただき、本紙  
で紹介していきます。

読者の皆様方の思いや、講演会のまとめなどをお  
寄せいただければ幸いです。

詳しくは、事務局までお問い合わせください。

新シリーズ **ヒデさんに聞く「倫理から人権へ」**

**井上英夫先生への質問を募集します**

**[シリーズ開始] 2013年10月号から**

日本の社会保障法学と人権論をリードされてきた井上英夫先生が、この4月に金沢大学を定年退職されました。保険医協会も井上先生のご協力によるゼミ、セミナー、勉強会などを通して、人権、社会保障について学ぶ貴重な機会を得ることができましたが、多くの会員の皆様は、井上先生の教えを聞く機会が今までなかったと思います。

そこで、本シリーズは、会員の先生方へ人権や社会保障、法律などについての素朴な質問をお寄せいただき、井上先生にできるだけやさしく答えていただく形にします。質問用FAX用紙を同封しましたので、お気軽に質問してください。大歓迎です。